

2023/01/27

I・HEAP (Historical Justice and History Education)

第19章 政治的善意，道徳的教訓，歴史的正義？

歴史的謝罪の動機と効果に関する高等学校生徒の考察

Political Good-Will, Moral Lessons, Historical Justice? Upper Secondary School Students on the Motives and Effects of Historical Apologies

担当：片山実咲（東京大学大学院）

■著者情報

Jan Löfström ([Jan Löfström | University of Turku \(utu.fi\)](https://www.utu.fi/en/people/jan-lofstrom))

○経歴

現在：トゥルク大学（フィンランド）の社会科教育学教授

過去：エセックス大学で博士号取得，その後ヘルシンキ大学

社会科教育学講師，リンネ大学歴史教育学客員教授など

○研究関心

研究テーマは，歴史意識と道徳意識の交錯。以前は歴史的謝罪の政治性，および歴史的意識の観点としての高等学校生徒の歴史的責任の概念に関する研究を行う。

その他，社会科の学問的基盤，経済教育，歴史教育における多文化的能力などにも関心あり。

○主要業績

Löfström, J., & Weber, B. (2022). Economic education: Its past, present, and future. *JSSE - Journal of Social Science Education*, 21(2).

Löfström, J., & Ouakrim-Soivio, N. (2022). Politics and ethics of civic and citizenship education curricula in Denmark, Finland, Iceland, Norway and Sweden. In *Handbook of Civic Engagement and Education* (pp. 182-190). Edward Elgar Publishing.



■用語，悩んだ訳語等

Historical Apologies（歴史的謝罪／歴史問題に対する謝罪），Historical Reparations（歴史的補償），Restitution（賠償？），Identity Politics（アイデンティティ・ポリティクス）
Historical Substance（歴史事象）

■議題

①研究の手法について

生徒への質問やフォーカスグループインタビューの手法は妥当か。より良い方法はあるか。

②実践への示唆について

日本の歴史の授業で道徳的な問いを扱うことの可否や留意点。

イントロダクション

国家などの制度的アクターによる歴史的過ちへの謝罪（歴史的補償;historical reparations）

ここ数十年で数多く見られるようになった。

※補償（Reparation）と賠償（Restitution）という用語が同意で用いられてきた。

歴史的補償，特に歴史的謝罪が近年盛んに行われるようになった理由

アイデンティティ・ポリティクスの台頭，歴史的アイデンティティへの感度の向上，紛争解決と移行期正義における歴史的負担への対処の重視，変革的社会政治プログラムの象徴政治への置き換え，国際政治における正義原則の強調など（Torpey 2006, Barkan 2001）。

人々が歴史的補償についてどう考えているかについての研究

フィンランドの高等学校の生徒の歴史的責任と補償に関する見解を調査し，生徒の回答が彼らの歴史意識について何を語っているかに焦点を当てた質的研究（Löfström 2014）

参加者：53人の高校生。3，4人のグループに分かれて議論。

議論の内容：①一般的な歴史的・道徳的責任と補償について，②フィンランドにおける内戦における残虐行為（1918）と8人のユダヤ人難民の国外追放(1942)の2つの事例に関する補償について。

本研究について（上記研究の再検討）

分析の目的：フィンランドの高等学校の生徒が，歴史的な謝罪の動機と効果についてどのような解釈をしているかを分析すること

参加者：17歳から18歳の高等学校2年生と3年生。20世紀のヨーロッパとフィンランドの政治史に焦点を当てた「国際関係」と「フィンランド史の転換点」を履修済み。

フィンランドの歴史教育の特徴：歴史的思考力よりも歴史事象（historical substance）を学ぶことが重視される。コア・カリキュラムに欠けているのは，歴史の道徳的側面と，歴史の個人的な意味への注目（Silfver-Kuhalampi et al.2021）。フィンランドでは授業における教師の自治権が強い。

フォーカスグループインタビューの特徴：あるトピックについて議論する際に，グループ内でどのような議論や観念がもっともらしく，魅力的だと受け入れられ，あるいはありえない／説得力がないとされているかを把握すること。個人の意見ではなく，どのような解釈がグループ内で共有され，受け入れられるか，あるいは疑問視されるかがわかる。

留意点:謝罪の動機と効果を区別することは期待していない。実際に生徒の発言は謝罪の目的と効果がしばしば絡み合い、想定される動機と効果が循環する形で組み合わせられていた。

インタビュー結果

生徒たちは、謝罪の動機と効果について、3つのグループに分類できた。

① 謝罪する組織の戦略的利益を促進する行為としての謝罪

歴史的謝罪は現実的な政策であり、国家間の関係を改善し、謝罪を行う側の利益を生み出すために用いられるものという認識。

(e.g.有益な貿易協定への道を開いたり、国際的に良いイメージを与えたりするなど)

② 謝罪する共同体に道徳的教訓を与える行為としての謝罪

謝罪は謝罪したコミュニティに対するメッセージになりうるという認識。

・過去の行為の道徳的な質は、時間が経つほど明確に判断できるようになるため、歴史的謝罪を「偽物」として捨象してはならない。歴史的謝罪は、謝罪する共同体のメンバーの道徳的良心の証となる

・歴史的謝罪は道徳的教訓であり、将来の道徳的失敗を防ぐのに役立つ

③ 歴史的過ちの被害者を救済するための行為としての謝罪

・被害者に損害を与えた者がいることを伝え、被害者の憤りを軽減する可能性がある
(マイナー)

・歴史的な謝罪は被害者であるはずの人々にとって意味をなさない、なぜなら世代を超えたトラウマは存在しないし、世代を超えた道徳的責任も存在しないからだ、という解釈 (メジャー)

まとめ

①②は、自発的に提起され難く展開されたことから、生徒にとってもっともらしく、容易に想像できるものであったことを示唆している。

③は、頻度も少なく、流暢に説明されることも少なかった。つまり、心理的・文化的被害に対処する目的で行われた歴史的謝罪は、非物質的な補償の一形態として、生徒にとって理解しがたい概念であった。(⇔旧大国が旧植民地に対して世代を超えた物質的被害に対する金銭的補償を行うという考え方は、グループ内で容易に理解された)

③についての考察：フィンランドの若者の特徴

- 道徳的責任を個人的責任という観点から考える傾向が強い
→歴史的責任という概念そのものに懐疑的である (Löfström,2014)。
- 過去が自分たちの人生にどのような影響を及ぼしうるかについて、より広い歴史的
文脈で説明することが困難 (Löfström and Hakkari,2003)
→過去に恩義や負担を感じる考え方は、彼らにとっては妥当なものでない可能性
※フィンランドは世界の植民地構造から多くの恩恵を受けてきた国だが、フィンランド
の若者はアフリカ諸国への補償を裁定する場合には、すべてのヨーロッパ諸国が支払う
べきという考えをほとんど支持せず、旧植民地国が支払うべきという考えもあまり支持
しなかった (Borries 1997)
- フィンランドの若者は、歴史の意味についてどのように考えているか(アンケート)
→謝罪は被害を修復するためのものではなく、過去の不公正を記憶する義務につい
て語るものであるという考え (例：「2度と繰り返さないために」)。

つまり世代を超えた非物質的「トラウマ」という概念は、生徒たちにとって想像すらできないものだった。その結果、歴史的な謝罪が、被害者や加害者の立場にある誰かにとって個人的に意味のあるものであることを思いつかなかった。

示唆

<成果>

インタビューにおける生徒の理解は、ナショナル・コア・カリキュラムの目標に沿う結果。
e.g.「過去に関する情報を獲得し、それを批判的に評価し、その相対性や複数の解釈の影響
受けやすさ、因果関係の複雑さを理解し、過去における人間活動を評価し、歴史現象を特定
の時代と現代の両方の観点から考察できる」(National Core Curriculum 2003, p180)

<課題>

歴史的謝罪が補償行為であり、歴史的正義を促進するものであると理解することが困難だ
った。その理由は、彼らが道徳的責任を個人的なものとしか考えていなかったことと、罪悪
感、恥、憤り、悲しみが世代を超えて続くということが理解されていなかったため。

<教育実践への示唆>

歴史カリキュラムにおいて、歴史の文化的、実存的、倫理的意味について、生徒が分析し考
察する能力を養うためのスペースが与えられることは重要なこと。具体的には、歴史の授業
で道徳的な問いに空白を与えることで、生徒のより洗練された歴史思考や歴史的共感にも
寄与する可能性が考えられる。